様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１７５０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ２２１９０

研究課題名（和文）フリースクールから社会への移行プロセスと進路支援に関する事例研究

研究課題名（英文）A Case Study on Transition Process from Free School to Society and Career Support

研究代表者
藤村　晃成（FUJIMURA, Kosei）

大分大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：００８８３１５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、フリースクールにおける進路支援のメカニズムや卒業後の生活世界に関する事例検討を行うことでフリースクールから社会への移行プロセスを当事者の視点から明らかにした。
研究の結果、学歴社会における学校的なメリトクラシーの概念がフリースクールのスタッフや卒業生の語りや進路形成に影響を与えており、フリースクールにおける実践と置かれた社会構造との関連に着目した分析枠組みの重要性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究を通して得られた知見は、先行研究の枠組みで十分に説明されてこなかった、不登校経験者における進路形成の課題を「学校外の教育の場」という視野から多面的・多元的に論じた点で意義がある。また、これまで十分に議論されていない学校外の教育の場を進路保障システムに包摂していく政策や取り組みを再考するための方向性を提示できた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to identify case studies on the transition process from free school to society and career path support from the perspective of the individuals involved.
The results of the study revealed that the concept of school-based meritocracy in an academic society influences the narratives and career path formation of free school staff and graduates. The study also revealed the importance of an analytical framework that focuses on the relationship between free school practices and social conditions.

研究分野：教育社会学

キーワード：フリースクール　不登校　進路・キャリア形成　社会への移行

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

日本におけるフリースクールは、主に不登校児童生徒を受け入れる非一条校の民間施設であり、公教育制度や学校の存在意義を問い直す存在として 1980 年代以降に全国に普及した。フリースクールに着目した研究では、既存の学校とは異なるフリースクールの多様な実践が展開されていることや、不登校をめぐる自己物語の変容を促す重要な役割を果たしていることが量的・質的調査によって明らかにされてきた。

一方で、これらの研究知見がフリースクール卒業後といかに関連しているのかという進路形成の視点に着目した研究は十分に行われていない。不登校の子ども・若者の進路に着目した研究は積み重ねられてきたが、オルタナティブな生き方をめぐる言説を提示し公教育制度や学校の存在意義を問い直してきたフリースクールの実践を進路との関係から読み解くことで、不登校経験者における進路形成の課題を「学校外の教育の場」という視野から多面的・多元的に論じることが可能となる。

そこで本研究では、個々のフリースクールにおける社会への移行プロセスをスタッフや利用者などの当事者の視点から描き出すことを試みた。

２．研究の目的

以上の背景を踏まえた本研究の目的は、フリースクールにおける進路支援のメカニズムや卒業後の生活世界に関する事例検討を行うことで、フリースクールから社会への移行プロセスを当事者の視点から明らかにすることである。

具体的には、規範的・標準的な進路形成を相対化する視点を有する若者の移行研究の枠組みを援用することで、先行研究では明らかにされてこなかったフリースクール固有の移行プロセスをめぐる語りに着目する。その上で、学歴社会における学校的なメリトクラシーの概念がフリースクールでの進路形成に与える影響について考察を行う。

３．研究の方法

本研究は次の 2 点によりフリースクールから社会への移行プロセスを明らかにした。

第１に、若者の移行研究の援用による新たな理論・分析枠組みの検討である。フリースクール研究と不登校研究で見落とされてきた課題を整理して比較し、双方の研究課題を明確にした。就労支援やひきこもりといった若者の移行の危機に着目した研究知見を援用することで、フリースクールからの制度的な卒業や進路決定・就職を「望ましい」移行モデルであるという前提を捉え直し、フリースクールの当事者による卒業後の生活に対する認識を社会構造との関係から分析する枠組みを検討した。

第 2 に、フィールドワーク及びインタビュー調査に基づくフリースクールにおける進路をめぐるスタッフ・利用者の認識の解明である。調査協力機関のフリースクールのスタッフや利用者・卒業生へのインタビュー調査を行い、フリースクール在籍時における進路支援や卒業後に利用者が直面する困難といった移行をめぐる多様なプロセスをミクロな視点から検討した。

４．研究成果

(1) 若者の移行研究の援用による新たな理論・分析枠組みの検討

まず、フリースクール研究と不登校研究で見落とされてきた課題を明確にし、若者の移行研究の分析枠組みがいかに可能になるのかを考察した。

フリースクールを対象とした研究の位置づけを整理すると、個々の質的研究を積み重ねながら多様性・柔軟性・流動性が明らかにされてきたが、それらの知見を包括する議論に至るための方法論の検討が十分に行われておらず、とくに、フリースクール研究において学校教育を対象とした進路研究の枠組みが用いられていない。それは、「学校外のオルタナティブな教育の場」という枠組みでフリースクール研究の独自性を論じようとすればするほど、学校教育研究から距離を置かなければならないという分析枠組みのジレンマに陥っているという課題が浮かび上がった。

一方で、若者の移行研究に目を向けると、労働市場や職業への移行の局面において課題を抱えがちな若者たちに焦点化した研究が教育社会学において蓄積されている。着目すべきなのは、2000 年代以降における雇用をめぐる社会状況の変化による従来のキャリア政策等への批判が高まり、それによって規範的なキャリア形成の在り方自体を問うことに近年の若者研究の意義が置かれている点である。これらの視点・分析枠組みをフリースクール研究に用いることで、学校教育研究から距離を置くのではなく相対化しながら、分析枠組みを設定することが可能になる。具体的には、制度的な卒業や進路決定・就職を「円滑な・望ましい」という規範的な移行ルート

であるという前提を捉え直しフリースクールからの「移行」に対する意味づけの解釈実践を試みる研究や、フリースクールにおける実践が置かれた社会構造といかに関連しながら行われているのかに着目した研究の可能性を見いだせた。

(2) フリースクールにおける進路をめぐるスタッフ・利用者の認識の解明

調査協力機関のフリースクールのスタッフや卒業生へのインタビュー調査を行い、フリースクール在籍時における進路形成のプロセスや卒業後に経験する生活に対する認識を明らかにした。インタビューから明らかになったのは次の 3 点である。

①フリースクールのスタッフは理念的に，制度上の「卒業」に囚われない「ゆるやかな移行」を支援しようとしているが，通信制高校との連携に伴う進路保障の役割を担うことで「進路決定／未定」のカテゴリーで卒業生を分類せざるを得ない文脈が生じていた。

②フリースクールを進路未定で卒業した者は，卒業後の生活について，「進学しない移行プロセス」に対する肯定的な解釈の余地があるにも関わらず，他の卒業生と自分を対比しながら高等教育機関への進学を実現していない遅延者として否定的な語りを構成していた。

③フリースクール内のメンバーの日常生活の中で，進路決定や大学進学という規範的なトラックが暗黙裡に構築・共有されているため，「進路未定」の卒業生として認識し他の卒業生よりも「遅れている」という感覚のリアリティを感じやすい磁場に置かれていた。

以上のように、フリースクール卒業生・スタッフによる進路に対する認識を明らかにすることで、フリースクールといった学校外の学びの場に進路保障の成果がより求められることが、逆説的にフリースクールの実践や利用者の認識の学校的社会化をさらに加速させる可能性があることやフリースクール卒業後の進路を語る上で学校的なメリトクラシー概念が密接に関係していたことが明らかになった。

また、フリースクールからの進路形成・社会への移行をめぐる実践において、社会状況の変容に柔軟に対応が可能であるフリースクールの独自性も明らかになった。具体的には、フリースクールが有する制度的柔軟性が機能することでコロナ禍の学校教育下で生じた子どものニーズを支える実践や、進路支援を含む子どもの実態やニーズを起点とした活動の創造と再構成が行われるという〈子ども視点〉を意思決定資本に組み込んだ実践である。

以上の成果は、学歴社会における学校的なメリトクラシーの概念がフリースクールのスタッフや卒業生の語りや進路形成に影響を与えており、フリースクールにおける実践と置かれた社会構造との関連に着目した分析枠組みの重要性を提示することができた。しかし本研究は、フリースクールから社会への移行プロセスの一側面を明らかにしたに過ぎない。フリースクールから社会への移行プロセスの多面的な描出やフリースクール内部におけるスタッフと子どもの相互行為について、今後の調査研究へと展開させていく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 藤村晃成　内田康弘　伊藤秀樹	４．巻 27
２．論文標題 「オルタナティブな学びの場」からみた新型コロナ問題――オンライン活用による不登校支援の可能性と限界	５．発行年 2021年
３．雑誌名 子ども社会研究	６．最初と最後の頁 89-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊勢本大　白松賢　梅田崇広　藤村晃成	４．巻 112
２．論文標題 教師の生きられた経験と専門職としての資本：コロナ感染拡大期の学校における意思決定に着目して	５．発行年 2023年
３．雑誌名 教育社会学研究	６．最初と最後の頁 31-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 藤村晃成
２．発表標題 フリースクールに新型コロナウイルスが与えた影響
３．学会等名 日本子ども社会学会第28回大会（ラウンドテーブルⅠ　オルタナティブな学びの場に新型コロナウイルスが与えた影響）
４．発表年 2022年

１．発表者名 藤村晃成
２．発表標題 フリースクールの実践からみた特別活動の可能性－学校内外の場所・制度を超えた「共生」の実践に向けて－
３．学会等名 日本特別活動学会第31回研究大会福岡大会（課題研究2「特別活動を通じた共生の可能性を考える」）
４．発表年 2022年

１．発表者名 藤村晃成
２．発表標題 フリースクールにおける進路保障の陥穽―大学進学をめぐる意味づけに着目して―
３．学会等名 日本子ども社会学会第27回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤村晃成
２．発表標題 The Transition Process from Free School to Society in Japan: The Dilemma of Free Schools’ Graduates
３．学会等名 The 27th Taiwan Forum on Sociology of Education（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤村晃成
２．発表標題 フリースクールにおいて「進路未定」はいかに解釈されているか？
３．学会等名 日本教育社会学会第72回大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関